大泉高校新聞

【発行所】
東京都練馬区
東大泉5-3-1
都立大泉高等
学校
新聞小委員会
電（3924）0318
〔発行責任者〕
1-4 河野大輔

生徒会規約第九条改正

ハンドボール同好会念願の部へ昇格

去る二月二十六日、生徒総会が行われた。メインの議題は、予算の承認、生徒会規約第九条の改正、部への昇格、部の休部の承認である。

予算の承認は手早く行われ、満場一致で承認された。次の生徒会規約第九条の改正であるが第九条は次のようになっている。

「第九条、本生徒会のすべての会議は原則として相対多数制を採用する。その会議の議決があって他の採決方法を一時的に採る場合はこれを認める。」

この文の前半部分に「相対多数制」という言葉があるが、これが意味がよく分からない、という意見があったのでこれに説明を加え分かりやすくする、というのが改正の内容である。この議決も満場一致で採択された。これにより第九条が改正されたことになった。

部への昇格・休部の承認でこれもすべて賛成多数で承認されたが、これによりハンドボール同好会は昇格でハンドボール部に、合唱、英語、映画研究、器楽同好会、ボート部は休部となった。休部中だった中から文芸部が復活し、社会研究、地歴部、落語研究、太極奉同好会が活動中止二年以上となったため廃部となった。なお、休部となったボート部はボート保管費用が必要なので予算が支出される。

自由討論の場では、円型校舎の学食で食券制度にしメニューを増やしたらどうかという案と、美術室、被服室に時計をつけてほしいという案がでた。しかしこの二つの案は、「前向きに考えます。」という言葉で終わってしまった。これは自由討論の場であるのだから積極的に反論してもらいたいものである。

この生徒総会はやはりいつもどおり、騒がしかった。前でしゃべっている人がいるにもかかわらず、好き勝ってにしゃべっており、トランプなどをしている。賛成多数などと書いたが、真面目に考えた人は何人いただろうか。自分達の生徒総会であることを自覚して参加してほしい。

二月二十七日木曜日、体育館アリーナで二年生女子による「創作ダンス発表会」が行われた。

練習は体育の授業中、そして早朝と放課後の短い時間だった。

一クラスを前後半（約十人ずつ）に分け、三分から五分の間に統一主題の「時」を表現した。

プログラムは、次の通りである。

1、三組前半「死の瞬間」
2、六組前半「思い出…生いたち」
3、五組前半「Liberation」
4、三組後半「The spider's thread」
5、二組後半「シンデレラ」
6、二組後半「青春…恋の予感」
7、七組後半「夢」
8、四組前半「水…川の流れのように」
9、一組後半「蝶の一生」
10、九組後半「おじいさんの古時計」
11、四組後半「Time is money」
12、六組後半「夢…おもちゃ箱」
13、八組後半「時効…midnightrun」
14、八組後半「みんな種…成長のよろこび」
15、九組前半「時…川は生きている」
16、七組前半「危篤…生と死の間に立つ」
17、五組後半「青春…ウエストサイド・ストーリー」
18、一組後半「Time limit」

LET'S DANCE!
―華やかに軽やかに―

以上のような内容だが、それぞれ工夫されていて、見ていて楽しかった。

照明を効果的に、舞台をすみずみまで広く使っていて、ダンスをおおきく見せていた。

衣装は、この季節のため記者には少々寒そうに見えたが、それぞれのテーマに合わせてよく考えられていた。

ダンスも、十人で合わせるのは大変なようだったが、リズムにのっていてまとまっていた。ねらいである自己表現の方法の実習や、協力する態度、鑑賞する態度を養うこともできたのではないだろうか。

踊り終って、練習の成果が発揮できて、皆ホットしたようだった。

全体的にまとまりがあり、良いダンス発表会だったが、椅子がたくさん用意されていたにも関わらず、観客が少なかったのは残念だった。

HEY! 柔道
―激しく　力強く―

去る二月二十七日、毎年恒例の柔道大会が行われた。今年は観客がかなり多く、柔道場やギャラリーを埋めつくした。今年は二年生は、もちろんだが、一年生がそれに負けまいと、応援していた。

試合前から選手も応援も少し興奮ぎみで、柔道部員の「試合開始」の声とともに、最高潮に達したのであろうか。観客の拍手・声ともにものすごいものがあった。

一年の選手の中に、試合会場の狭さに不満を言う者も少しいたが、試合が始まればそんなことはあまり気にならなかったようだ。

応援もまたすごかった。「一本」や「技あり」の声がでると大きな声援が聞こえた。あまりに大きな声援のため、審判の声が届かなかったようなこともあった。選手も「一本」の声がでるとガッツポーズをして喜びを表現していた。負けてしまった者は、あまりのくやしさにしゃがみこんでしまい、ショックを隠せないようであった。

本校の柔道大会では、技を制限してあって「禁じ手」というものがある。その中の一つに「内股」という技があるのだが、「大内刈り」と似ているために、「内股」を使ってしまう選手が多かった。しかし、いろいろな技を組み合わせながら、また頭を使って必死に技をかけようとしていたのが印象的であった。また、寝技（固め技）に入って必死に解こうとする者。またそれをこらえようとする者が非常に対照的で、見ている者を熱くした。

ここで結果を報告しよう。

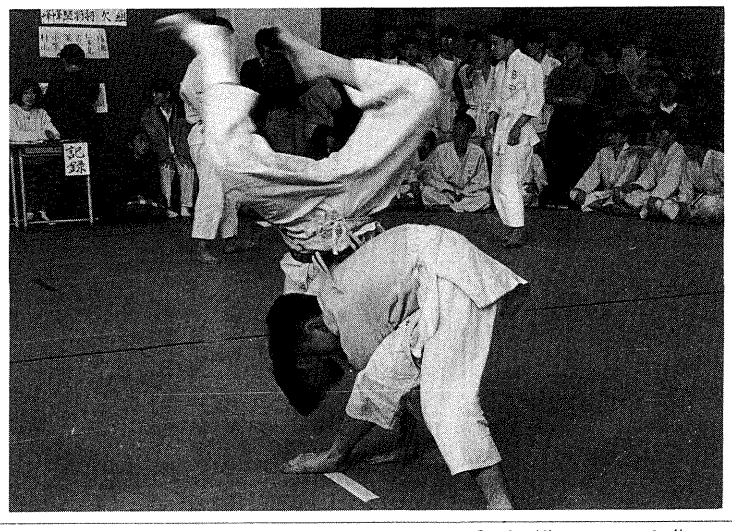
一年生
総合一位　一―四・一―七
三位　一―九
二年生
総合一位　二―五
二位　二―三
三位　二―二・二―七

今年は重量別ではなく、総合としての表彰であった。

やはり、重量級は、体の大きい者同士のぶつかりということで、ものすごい迫力があった、軽量級は、その反面敏しょうな動きで相手を揺さぶって、技をかけていた。それぞれ白熱した試合が数多かった。決勝戦ともなると、両ベンチ又、観客からものすごい応援が飛び交った。優勝したチームは胴上げをしたり抱き合ったりしていた。チームの心が一つになり、勝ち取った優勝だけに心から喜べるのであろう。

今年は負傷者が数人いたが、充実したすばらしいものであった。勝ち負けに関係なく、出場した選手、応援者等満足できたのではないだろうか。

二年生は最後だが一年生は来年に向けて頑張って欲しい。来年をまた期待したい。



路標

▼今回で大泉高校新聞は一五〇号を迎えた。第一号発行は昭和二十五年六月二十二日である。四十二年の歴史が流れた訳だ。当時の新聞は年に五回も発行していたそうで、今の三回と比べるとかなり委員会に活気があった事がわかる。▼最近、全国的に学校新聞の衰退化が囁かれている。そして我が新聞小委員会でもこの風潮が顕著にあらわれている。活動で召集の放送を流しても全然委員が集まらない。はっきり言ってこの新聞の記事を書いてくれた人は、全委員の半分にも満たない。又、書いてくれた人も〆切を守れない。編集は、委員長とやる気のある二、三人でやりくりしている有様だ。まさにひん死の状態である。こんな事ではよい新聞、活気のある新聞はできるはずがない。▼このような状況は他の委員会活動・生徒会活動にも当てはまる事はないか。執行委員の候補者は全然でてこない。さまざまな委員会活動があってもメンバーが揃わない。これは全て生徒に問題がある事だ。生徒主導であるはずの生徒総会で、話をきちんと聞いている人はいないに等しいし、重要な決議は自然承認。こんな事では駄目だ、学校の衰退化も、目に見える程に進んでいる。▼現在、世界は動乱の時代を迎えている。そしてこれからの社会、どうなっていくのか予想もつかない状態だ―これから我々はそのような次の時代を背負って生きていかなくてはならない。その時、社会が今の大泉高校のようにやる気のない状況であったなら、社会は一気に崩壊してしまうであろう。我々は次の時代の担い手である。その事を肝に銘じ、まずは大泉高校を活気のある学校に変えていこうではないか。

資源回収を実施して地球を救え!!

～空缶回収一周年迎える～

昨年四月八日より開始した全校挙げての大事業「空缶リサイクル活動」は、一周年を迎えようとしている。

ゴミ問題が深刻になっている今、再利用できるものは極力回収すると共に、校内のゴミ分別を、徹底させる意味で始まった空缶回収、この一年を振り返りましょう。

まず、果たしてどれだけのゴミを減らすことができたのでしょうか。

みなさんは、大泉高校から出される一般ゴミも有料だということを、御存知ですか。

独自の追跡調査によると、空缶回収開始前後の年のゴミ処理費を比較してみると、次の驚くべき結果が得られた。

(前)90年・47万5千円（346円）
(後)91年・35万円　（271円）

＊両方の年は、4～12月の間の処理費で、（　）内は生徒一人当たりを示す。

生徒数が減少していることを考慮しても、22％の処理費を削減できた訳である。今まで、大泉校生は大量に空缶を不燃物として捨ててきた。その分を回収したのであるから、物質的には相当なゴミの量を減少させることができているはずだ。

しかし、回収された空缶すべてが、資源として再利用されていない。アルミ缶は問題ないが、スチール缶を引取る業者がいない。

これは、鉄くずが暴落したためで、大泉高の空缶倉庫は、スチール缶でパンク状態。学校側は、回収業者と交渉しているが、この危機を乗り越えるには、まだ時間がかかる模様。

校内から集まる空缶は、業者に引渡す前に、生徒の手によって潰される。作業は、電動式プレス機（通称・かばちゃん）に空缶を投入し、後は機械が潰し、アルミ・スチールを分けてくれる簡単な作業である。だが、校内で十分にゴミ分別がなされていないので、作業が厄介になっている。また、飲み残した缶から出る悪臭も作業の妨げの一原因である。心がけ次第で解消できる問題なのでみんなの協力が不可欠である。

ところで、空缶リサイクル活動は、実に早い対処で実施されている。

91年2月＝生徒総会で採択。
生徒会と学校側本格協議
同年4月＝保健委員会によって校内に空缶回収箱設置。清掃極よりプレス機借用
同年6月＝空缶プレス機購入・都の再利用実践団体に認定。
同年7月＝クラス当番制導入。

なかなか腰を上げない学校側であはあるが、社会情勢を読み取った今回の敏速な対応に、大泉教職員の空缶回収への熱意が伝わる。

この一年、空缶回収を支えてきた生徒側の関心を聞いたところ、84％の人がこれからも進めていくべきだと考え、5％の人が回収しても仕方が無いと考えている。（83人の標本調査）依然として、空缶回収への高い関心がある。

▲空缶つぶしをしている生徒（1－4）の様子
校内テニスコート前において　Ⓒ 写真部

武士

武士とは、武をもって主君に仕え、戦場では命を賭して手柄をたてていた戦士だった。しかし、ここでは江戸時代の、過去の功績や門閥・家格によって区分・固定化された武士について書く。

江戸時代になって武士は、大名・旗本・御家人と三段階に区分された。

まず大名だが、その第一の資格は家禄が一万石以上ということだった。この石高は表草高（それだけの米――麦・大豆などは米に換算――の収穫があると認められた土地の広さを石高に換算したもの）なので土地の荒廃・災害等で収穫が表草高の額に達しなくても大名の資格を失うことはなかった。

第二の資格は、将軍直属の臣であること。たとえ家禄が一万石以上でも、大名の家臣は陪臣（家来の家来）だったから大名とは認められなかった。長集毛利家の老臣吉川監物の周防国岩国六万石、越前松平家の本多内蔵野助の越中国府中二万五千石などである。

次に旗本だが、旗本は本来事が起こったとき手勢とともに本陣の太将のもとに馳せ参じ、直接主君を守護することを任務としていた。ところが江戸時代には御家人とともに将軍直属の家臣（直参）といわれ、大名につぐ武士としての階級を意味するようになった。この旗本と御家人の区分は明確ではない。旗本とは家禄一万石以下二百石以上の者ともいわれるが、多くの、あるいははなはだしい例外があるので将軍に拝謁を許される資格のある者が旗本、資格のない者が御家人であるという区分が行われた。

御家人は、鎌倉時代に始まった固定的な身分の呼称であったが、江戸時代に直参ではあるが下級武士であるという、階級的な差別を意味するようになった。実際、多少の例外はあるが、同じ直参である旗本の給与すなわち俸禄は御家人よりはるかに高かった。

ちなみに江戸時代の武士の俸禄は、その家を対象とする親族団に与えられるもので世襲として保証されていたので家禄ともいった。

御家人の役職に与力・同心というものがあったのはよく知られていると思う。余力・同心は古くは、常には被官（上級武士に仕える一般武士）していないが、事がおこった時には協力する者をいった。

町与力・町同心は時代劇でもおなじみの町奉行の与力・同心だが、与力・同心は町奉行だけでなく、幕府の御留守居・大御番頭、御書院番頭・御先手頭・定火消御役を初め諸奉行の配下にもある。

興味にある人はそれらを調べてほしい。誤解の多いのに驚くかもしれない。

祟り

筆者はこの一見、皆目見当もつかない題名の記事を書くために大変腐心した末、記者の無二の親友である糞悪土さんに特別、取材を手伝ってもらう事にした。取材と行っても大した事ではなく、彼の身の上話と言った方が的確なのであろう。以下は糞悪土さんの話である。ちなみに糞さんは日本人ではないので通訳は記者がさせてもらった。

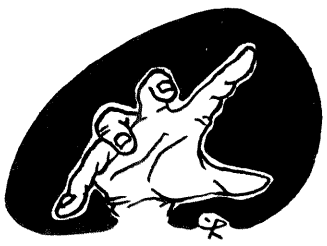
「エー、ウォッホン、私がただ今紹介を受けた糞でアール。今日は甚だ恐縮でアールが私の陳情をいたいのでアール。ウォッホン、昔私が若かったころは、人間と私達は仲良く平和に暮らしてたのである。私達の敵と言えば雀や土竜ぐらいなものである。しかし人間たちはそれらの動物を追い払い、お礼に私たちは畑を耕していたのである。子供が時々いばりをひっかけるのでさえ、叱ってくれたのである。それがある時、人間達は我等を裏切るという糞に出たのであーる。畑には様々な薬がまかれ、ある者は病死し、ある者は安住の地を求め放浪の旅に出たのである。このような土地は自然の循環も停止し痩せ細るのは自明の理である。また、畑の周りを道路が取り囲み、車などというたわけた乗り物がブーブー、パッパーブーパッパーと走り廻り迂闊に飛び出そうものなら、たちまちペッチャンコである。これでは出るに出られない、出なければ殺されるで、さながら地獄絵の様な有り様である。

人間たちが、この様に四六時中、排気ガスでスパイスされ、殺虫剤でバッチシ味つけされたものを平気でウマイウマイと食べてるのを見ると、感嘆の念を禁じ得ないのである。この様な恐ろしい怪物どもと、昔平和共存していたとは信じられないのである。いつの日か、この報いが訪れる時が来ようぞ。

最後は多少興奮気味の氏でありましたが、このように人類以外の生命から見る地球というのは大変住みにくいものになっているのである。さらに、その張本人である人類はその活動をいっこう弱める気色もなく、さらなる発展へと活発になっているのが現状である。揚げ句の果ては自分達までも苦しめ始めると言う有様である。

ところで、誰しも鳥などの人間以外の動物になりたいと思ったことがあるだろう。鳥は自由だとか空が飛べるなどと言った理由で。

しかし、人間は太古の昔から、それらの動物を狩ってきた。現在ではその住み家をも破壊している。それでもなお某に生まれ変わりたいなどと言うのである。人間は自己が苦しい立場に立たされたり、自分にないものを他者が持っていると、他者をうらやんだり、またそれを手に入れようとするのである。これらが前述の原因の一つであろう。かといって、人間が太古の昔の生活に戻るのも不可能であろう。なぜなら私たちの身の周りには正常な生態系など存在しないからである。せいぜい短い人類の命を謳歌しようではないか。



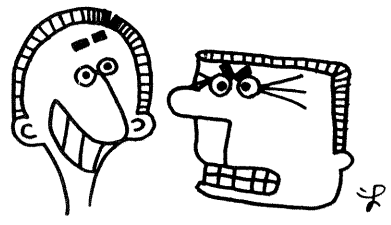
ある列車の出来事

まだまだ肌寒さが続く二月中旬のある日、私は新宿に用を思い立ったので外套を着込んでその町に赴いた。そこには何度となく足を運んだ事はあったが、やはり好きになる事は出来なかった。その日は疲れていたので私は手早く用事を済ませると何処にも立ち寄らずに駅へと足を運ばせた。

電車に乗ってから何分か後の事である。私のすぐ後ろに立っていた乗客（以下Aとする）が不意に驚きの声を上げた。「こんな所で君に会えるなんて！」と、そう呼ばれた男（以下B）は丁度向こうからやって来た所だった。彼も又この予定外の面会を驚いたが、彼らは両方ともこれを喜んだ。どうやら旧友同士らしかった。それから彼らは久しぶりの談話を楽しみ始めた。

私は何気無くその平凡な会話を聞いていたが、そのうちウトウトと眠たくなってしまった。だが不思議と話し声だけはよく聞こえた。

A「所で今の暮らしは？」
B「あんまりいいとは思わないね。」
A「ふ～ん。お金でも足んないの？」
B「いや、そんな問題じゃないんだよ。何て言うかさあ、全てがつまんないんだよね。最近。」
A「いきなりどうしたの？まあ僕もそうはそうは思うけど…」
B「だろ！　大体今は全てにおいて盛り上がりがないんだよ！　旧ソ連のような、社会を自分達で作ろうとする根本的な盛り上がりがないんだもの、当然だよ！　だから今は結局内身のない、つまらない盛り上がりしかないんだよ。あ～あ、ほんとに嫌な世の中だなぁ。」
A君、少しの間考えて
A「なるほどね。確かに君の言う事ももっともだ。でも僕の意見も言うけどこれは仕方無い事なんじゃない？この状態は結局物質的に豊かになっちゃった証拠だよ。人間は元々物質的な貧しさに対して反応する動物だからね。だからこんな世の中じゃ皆もやる気がなくなって社会を変えていこうという気も起きなくなるのさ。これは仕方無い事なんだよ。」
B「あ～あ、嫌んなるよ。」
A「でもね、大事なのは今をどうするかという事なんだ。悲嘆してたって何も始まらないよ。大丈夫、必ず変わるよ。今一番必要なのはそう信じる事さ。」



私ははっとして気付いた。そこで眠っていたのだ。そして背後からはA君とB君の楽しいそうな笑い声が聞こえてきた。

プロサッカー誕生
Jリーグ

日本サッカー界が大きな変ぼうを遂げようとしている。一九九三年、プロリーグのスタートだ。

なぜ今、プロリーグなのか。それは、日本サッカーの現状が如実に物語っている。

東京オリンピック（'64年）での健闘を契機に、更に代表チームを強化しようと、翌年日本サッカーリーグ（JSL）が発足。しかし、その後オリンピックに出場したのは'68年のメキシコ大会（三位）のみで、ワールドカップに至っては予選すら突破したことがない。アジアの中でも韓国、中国などと大きな差がある。

又、近年、少年の競技人口が増えており、サッカー人気も徐々に上がってきているにもかかわらず、JSLの観客動員は伸び悩み状態。

「企業の広報の一環、いわゆるアマチュアスポーツでは限界で、このままJSLを続けても見通しは暗い。日本サッカーが世界へはばたき、そして少年に夢を与える意味でも、今こそプロリーグを作るべきだ。」

こうしてプロリーグ設立について本格的な話し合いが始められたのが'88年3月。そして、三年目を迎えた'91年2月、ついに参加10チームが決定された。

- 住友金属（茨城県鹿島町）
- 三菱自動車（埼玉県浦和市）
- JR東日本古河（千葉県）
- 読売クラブ（神奈川県川崎市）
- 日産自動車（神奈川県横浜市）
- 全日空（横浜市及び九州全域）
- 清水FC（静岡県清水市）
- トヨタ自動車（愛知県名古屋市）
- 松下電気（大阪府）
- マツダ（広島県広島市）

参加チーム決定という大きなハードルを越え、残るは成功へ向けての環境整備のみ。まず、簡単にプロリーグの概要を説明しよう。

正式名称は、邦文表記が「日本プロサッカーリーグ」、英文表記が"Japan Professional Football League"。そして愛称は"Jリーグ"だ。

又、ロゴもJをかたどったもので、中の円は日本の国旗の日の丸をイメージしている。

リーグ戦のスタートは'93年の春（'92年秋にプレ大会を行う予定）。開催時期は春から秋で、毎週土曜日にナイターで行われる。

更に注目したいのが開催方式。リーグ戦を二回に分け（2ステージ制）、それぞれのチャンピオンをまず決定。そのチーム同士で真の優勝チームを決めようというものだ（グランド・チャンピオンシップ）。要するに、プロ野球でいう、セ・リーグ、パ・リーグから「日本シリーズ」というようなものと思ってよい。

テレビ放映をどうするかはまだ未定だが、ラジオはニッポン放送が独占中継。又、10チームのユニホームはミズノ社のもので、統一されることになっている。

参加チームも積極的に準備を整えている。

住友金属は、鹿島アントラーズFC、清水FCは清水FCエスパルス、そしてトヨタ自動車を中心に地元の有力企業で共同出資する名古屋市のチームは名古屋グランパス8と、プロリーグ時からの新チーム名を決定。清水FCエスパルスはエスピノーザ氏、名古屋グランパス8は平木隆三氏を監督に招へいした。

鹿島アントラーズFCはブラジルの英雄、ジーコを獲得した。プロリーグの発足、そしてジーコの来日により、世界のトッププレーヤーが日本に目を向けており、リネカーも次いで来日（今は、一時帰国）。又、カレッカ、フリットなどの名前も上がっている。

一からチーム作りを行う清水FCエスパルスは、日産自動車から長谷川健太、ヤマハ発動機から大榎克己らを早くも獲得。このように移籍も活発化している。

古河電工とJR東日本がタイアップして参加を決めた東日本JR古河は、準フランチャイズとして東日本全体を考え、まず宮城県仙台市にサッカースクールを開校。また、JRの車内吊りで試合の告知をするなど、その機動力を早くもフルに活用。

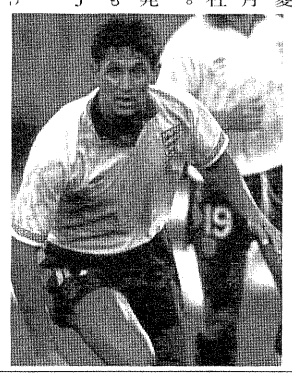
松下電器は、日本を代表するストライカー、釜本邦茂氏を監督に起用。他にも、読売クラブらが、法人化を終え、マツダ、日産自動車、三菱自動車も'92年4月1日までに新会社を設立する予定だ。

又、プロリーグ発足後の下部機構も決まった。現在のJSLを再編成し、"JAPAN FOOTBALL LEAGUE"（JFL）を結成。一部（J1）、二部（J2）、それぞれ10チームでリーグ戦を行い、将来的にはJ1からJリーグへの昇格（最終的にJリーグは16チームにする意向）、そして16チームになった時点でJリーグとの入れ替え戦を行う。

以上が現時点でのJリーグの動きだが、プロリーグができたからといえ、すぐに代表チームが強くなり、観客が増えるというのは、早計かもしれない。しかし、選手、指導者、そしてチームが、"プロ"という厳しい環境のなかで最大限の努力をせざるをえない以上、少なくとも現状より悪くなることは考えられない。日本のサッカーが向上することはまず間違いない。

リーグ戦のスタートまであとわずか。"Jリーグ"がぜひ成功し、日本サッカーの発展につながることを期待したい。

〈参考引用〉
サッカーマガジン
サッカーダイジェスト他



青春雑感

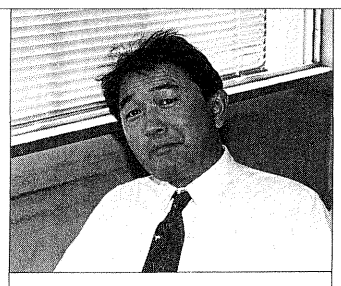
国語科　藤原　満

第46回全国大会準決勝後半終了間際、天理高校の植村に40ヤードの独走を許した瞬間、試合の緊張（6対6）は破れ明暗は分かれた。同時にそれは自らに課した一つの課題の終了を告げるものであった。

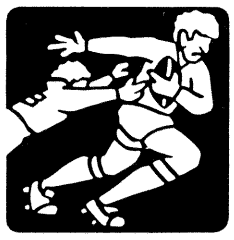
ノーサイドのホイッスルが「花園」の冬空に突き刺さる。そのとき、うっすらと心に滲み出たあたたかさは、あるいは張りつめたるものからの解放だったのだろうか。下級生の多くは、冬枯れの芝に膝を落としていた。「みっともないから泣くな！」自分もそんな言葉を吐いたかも知れない。スタンドの恐ろしくうす暗い廊下をくぐって、ロッカールームにもどるまで、誰も口を開くものはなかった。そうして冷たい部屋の片隅で力なくジャージーに手をかけた瞬間、期せずしてコンクリートの床を黒々と染めるものがあった。

幼き日、感動の一瞬。

あれも今にして思えば、友らみな受験を控えた苦悶の戦場にありながら、独り超然と「青春の花影」を追い求めてきたことへの誇りと、あるいは、そんな自分の健気さを愛おしむかのような……それはまるで砂糖菓子の崩れゆく舌触りに似て優しく爽やかな涙でもあった。そしてその時、かかる感涙は、生涯二度と訪れることはないであろうと実感したものである。



ある季節としての「青春」。その実体は生きた者のみが知ることのできるものなのであろうか。少なくともこの僕にとって、その後の人生を貫く思想の骨格が、この実体なるものと深い関わり合いを持ちながら、形成されてきたことを痛感せずにはいられないのである。



精神の形成期たる青春は、ある意味では人生を決定づける存在なのかも知れない。

可能性に満ちているということ、可能性に酔えるということはそれだけで美しい。しかしそれが本物の輝きでないことは、誰の目から見ても明らかであろう。青春に限らず人生の全体に渡って、それはいえるのではなかろうか。

永き日の礎のために
君が青春を一つの創造で満たせかし！

読者寄稿

「祖国を思う」

二―九　飯高　裕之

米国大統領の襲日も終わり、改めて日本は米国の単なる属国であることを痛感した。世界で最高の品質を自負し、実際には劣悪な品質と、魅力のカケラもない自動車や部品の「押し売り」、日本の国内法への完全な内政干渉等、米国は我国を飼い犬の如く見ている（飼い犬はいつか主人の手をかむものである）。

ヨソ者に指図されて、どうする事も出来ずに言う事を聞き入れてしまう現在の日本も国家として健康な状態ではない。

現在の日本は四十年以上前に民族の自決を失った、奴隷国家である。

自らの方向を自らきめられず、絶えず米国の言いなりになったまま現在に至るまで屈辱を受け続け、辛酸を舐め続けてきたのである。

一九三〇～四〇年代のドイツの偉大な指導者アドルフ・ヒトラーは自身の著書で「民族の自決は国家の根幹を成すものであり、自決を確立した優秀な民族のみが繁栄できる。」（要訳）と説いている。

日本民族が国際的に相当な富を築きながら、「精神的に豊かではない」と感じ、また自身を世界に誇れない一因はここにある（勿論、余暇や娯楽の問題もあるが）。

独立した自主自決の国家を標榜しながら、優柔不断で、不当な内政干渉ですごすごと身を引いてしまう。こんなことでは民族の誇りなど、あったものではない。

要するに自分の意志や決定を明確に主張出来ない、もどかしさを感じているのだ。

それ程表面化していない事だが、ニュース等を見る度に、こう感じる国民は少なくないはずだ。では、民族の自決を確立するには、どうすれば良いか。

一つは明確な主張と「NO」と言えることである。

もう一つは、それに対する裏打ち、つまり相手に屈しないだけの戦力をそなえることである。

一九三五年、ドイツはベルサイユ条約という束縛を拒否、再軍備を宣言し、それからの数年間はドイツの歴史の中で今も大半のドイツ人が懐かしむ繁栄の時代であった。

つまり、一人の偉大な指導者によって民族の自決が確立されていたからである。

ただ、ドイツや日本（やや、あいまいではあったが）の場合、時代や開戦のタイミングが悪かったのが惜しまれる。

しかし、現在は核兵器の時代である。

核兵器は、少量で最大限の効果を発揮できるため、相手と同数揃える必要がなく、例え近隣諸国等より、その保有数が少なかったとしても使用すれば互いの破滅が明らかなため、報復戦争が目的ではない限り、抑止力として働く。これが「核の抑止力」である。

従って相方の不当なエゴの押し付けを防止し得る手段であり、また唯一のものであろう。ところが、日本は現在まで、これを持たないがために、何時侵略されるやも知れぬ状況に置かれ、また外圧にも抵抗することが出来ずにいるのである（北方領土、尖閣諸島問題など）。

「非核三原則」なる非現実的な降伏思想を掲げている間にも危険や、いつかやって来るであろう強大なエゴは着実に増幅しているのである。

今、日本民族が最後の決断を下さなければ日本民族は永久に滅んでしまうだろう。読者諸兄は祖国の将来をいかがお考えだろうか。

あなたの敵を愛せよ

三―五　西崎　浩之

昨年を以てソヴィエト連邦が崩壊して今、過去につくった核兵器をどう管理するかが問題になっているが、冷戦が終結に向かう中で東西対決の戦争はおそらく起きる原因がないのだから、もはや核兵器はゴミ同然となっていいはずだ。だから時代は核兵器を管理するというときから、どう処理すべきかと考えるときに変わっていかなければならない。だのに、国力の維持のためだといって、他の国にハッタリをかますべく、いまだに核軍拡を裏でもくろんでいる国の代表だといって大きな顔しているオジサンが存在するとは大変に困ったものである。

なぜオジサン達は武器作りにはげんでいるのか？　それは先に述べたように国力の維持のためのハッタリであることは言うまでもない。それだけでは原因の説明にはならない。なぜハッタリをかますのかまで明らかにしてこそ、その説明として成り立つ。それはどういうことであるかというと、国交関係の相手方を全く信用せずにいて、もし自国に不利なことでも起きたら、武力をもって自分のいうとおりにしよう、相手が武力を使いたくないのなら笑顔でむりやり握手しようという下心があることである。短くいえば、握手しながらけとばしあっている、一つまちがえば暴力団である。

読者の皆さん！こんなひどいことが許せますか！！

人間の心を暴力というものであやつって、その結果人間社会は大混乱をおこした。まさに今起こり得るいけないこと、そして四十数年前、私達の愚かな先輩が起こした二つの大戦が、このような条件下のなかでおこった。真珠湾攻撃によって幾多の命を海に沈め、アウシュビッツでは、ガスの中で人々がもだえ死んで、日本・朝鮮では皇民化政策や強制連行などアジアの人を動物扱いにして、今もなお人々に深い傷を残している。

これらの愚行の原因といえば、全体主義、国粋主義といった、人権なんてみとめられない世間が存在したことである。アドルフ＝ヒトラーは社会主義を名乗って国民をだまして人気を得て、支持者を彼の著書「わが闘争」で以て洗脳し、それからというもの、動物の調教のごとく国民を自分の手のごとく動けるように、暴力で制裁した。そうすると国民はヒトラーの数々のウソによって、帝国主義政策やら国粋主義政策に服従して、多数の貴いユダヤ人の命をうばい、非人道的な行為をくり返した。

だのに人々はなぜ懲りないのだろうか。甘い見解かもしれないが、私は人々に"愛"というものがないからだと思う。小学校の時教会学校で、あなたの敵を愛しなさいとよくいわれた。今の世を視ると、人々は自己中心的になり、敵どころか隣人までも愛さない、ある意味で排他的になっているような気がする。別に宗教を信仰しろといっているのではない。人間らしく、敵や弱い人のことを親身に考え、いさかい事のない清く正しい世界が生まれるように、一人一人が心がけなければならない。それには正しい心とそれを形成していく判断力が必要であると思う。国粋主義よさらば。

文芸欄

指輪物語

一つの指輪はすべてを統べ、一つの指輪はすべてを見つけ、一つの指輪はすべてを捕らえて、くらやみのなかにつなぎとめる。

影横たわるモルドールの国に。

これは指輪物語の冒頭に書かれている言葉の一部分である。指輪物語、この余りにも壮大な物語を御存じの方々も多い事だろう。

事実、この書は世界中でベストセラーとなっているほどよく読まれ、知名度も高く、アメリカでは熱狂的ブームまで起こしてしまった。

さてここで、話を変えて内容の方に移りたい。この「指輪物語」は簡単に言うと、ファンタジー（空想物語）文学という事になる。魔法使いの姿が小鳥に変わり、竜が空を舞うあの世界である。そして、「指輪物語」はそのファンタジー文学の最高傑作と称され、又、これまで低く見られていたファンタジーを大人も楽しめる文学にしたのもこの本である。

最後にストーリーについて書きたいのだが、前にも言ったようにこの話は余りに壮大なので、すべてを話す事は到底出来ない、が、本を知らない方もいると思うのでほんの触りの部分だけでも書いておこうと思う。

これはホビットと呼ばれる小人族の一人、フロドの冒険物語である。叔父のビルボから譲り受けた指輪は世界をも支配する強大な魔力を秘めていると知らされ、それを悪の手から守るために旅立つというのが大体の筋である。

確かに長い話だが、面白く読む価値があるので、もし暇だったら是非読んで欲しい。

ここで作者の紹介をしたいと思う。トールキン（一八九二～一九八三）というイギリス人で言語学者であった。彼は何と二十年近くも掛けてこの話を完成させたという。

書評

ミュージシャンからのメッセージ

今回は、「ロック歌手の書く物語」ということで変わった趣向でお楽しみ項きたい。

早速だが、作者の紹介をさせてもらうが、「木根尚登」という人物を知っているだろうか。TMNというバンドでギターを担当している。彼はTMN（当時TM NETWORK）の「CAROL」というオリジナルアルバムに沿った同名の小説を書いた。読んだ人も多いだろう。そして、その後「ユンカース・カムヒア」「ユンカース・カムヒアII」という小説を発表した。「ユンカース」というのは、同じTMNのメンバーである小室哲哉のペットである。彼が木根尚登に、

「ぼくのユンカースで小説を書いてよ。」

と言ったのがきっかけだそうだ。なんとも単純である。

これらの三作品は、もちろんフィクションであるが、著述業を本職にしている人よりもとても新鮮に感じられる。なぜならば、彼が素人だからである。全くの素人が本を書くというとかなり大変だろう。作家もある情景を言葉・文にするときに、もの凄いエネルギーを使って全身全霊をその作品に傾けている。彼が全然そうではないと言っているわけではない。彼はギタリストなのである。音楽が彼の本職なのである。彼も自分で、

「別に国語の成績がよかったわけじゃない。」

とも言っている。こうした異色ぶりを発揮して、本を書いているということは、音では表現できない、しにくいものを言葉で表わそうとしているのではないだろうか。

最新作「月はピアノに誘われて」は音楽にいちばん近い小説と書かれている。彼がいちばん書きたかったジャンルであろう。

木根尚登に限らず他のロック歌手の中にも本を出版する人がいるが、彼らも同じ気持ちで書いているのであろう。

今回は木根尚登について書いたが、有名著者ばかりでなくこういう本も読んでみるのもよいのではないか。

オタクとは

オタクとは何でしょうか、まずその語源から調べてみることにした。

知恵蔵によれば、▲アニメの一分野にのめり込んだ若者が、話の通じない他の分野にのめり込んでいる他人に「おたくはどうですか」と挨拶したことから発生した▼と書いてある。「つまりオタクとは、他人に話しかけるときの挨拶の第一歩であった。

次に、私はオタクを調べるに当たって、ガイナックスの出している「おたくのビデオ」というビデオテープを入手し、それについての粗筋と内容を述べることにする。

主人公、久保はテニスに勤しむ、ごく普通の大学生で、とあるエレベーターで高校時代の友人に再会したことにより、おたくと呼ばれる世界にどんどん引きずり込まれて行き、最終的にオタキングになるというアニメーションであるが、約15分ごとに、〝おたくの肖像〟と呼ばれる実写のコーナーがあり、そこで顔にモザイクが掛り、音声を変えた深いキャリアを持つ様々なオタクの人々が出て、過去又は現在を回想するという物も収録されている。その内容はロリコン、コスプレ、ミリタリー、AV、ガレージキット、アニメを学ぶ外人、パソコン、セルドロ等である。この中に一貫して言えるのは、マイナーで実生活の役に立たないものばかりであり、先号で説明したコスプレを除けば、総べて根が暗い。

では、根が暗ければ、すべてオタクなのだろうか。私の思う所、オタクとは、自分はオタクではないと思っている人間が他人を見た時、その相手が自分に無い知識、感情、取り柄等を持っていたため、相手に対し、嫉妬やバカにする時の感情を心に抱き、差別的な意味で相手をオタクと決めつける、つまりオタクとは差別であり、根が暗かろうが、明るかろうが、関係無いのである。

では、オタクと呼ばれる人間には、罪が無いのであろうか。例えばセルドロは、その名の通り、セル画の泥棒である。又、スリルも楽しむ万引き、未成年でも平気な顔をして煙草を吸う人、シンナーを吸う人、連続幼女誘拐殺人事件でにわかに脚光を浴びた極度なロリコン、自分の欲しい物の為に徹夜で店の前に並ぶ人、このようなオタクは有害であり、犯罪であると言える。

では、何故人はオタクになるのか。先にも述べたオタクは実生活の役に立たない。つまり、自分の夢、ユートピアを心に秘め、その夢を増幅する。オタクは現実逃避をしているのである。例えば受験勉強をしている受験生が、今まで買ったこともないマンガを買ったり、ゲームセンターに通ったりすることだろう。

人間誰でも持っている現実逃避、それはオタクへの第一歩なのです。つまり誰でもオタクであり、より重傷なオタクになる可能性を持っている。

貴方の心は貴方の体を離れてオタクの世界へと入って行くのです。

新聞小委員会では、記事に対する抗議や批判、意見や反論をお待ちしています。どしどしご投書下さい。

P.S　先号の私の記事のコミケットの日時が、28日29日となっていましたが、29日30日の誤りでした。どうもご迷惑をおかけしました。

よたよた列車大紀行

第二回米坂線

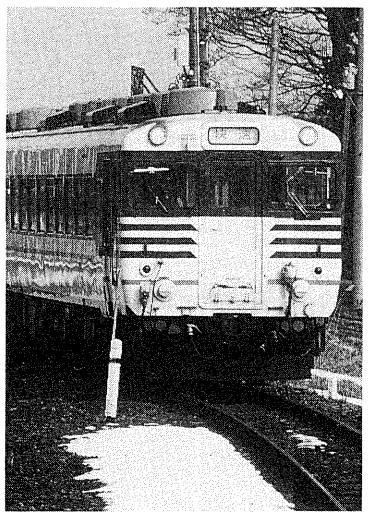
普段はお金も時間もないが、時としてその二つが同時に手に入ることもある。そんな時はすべてを忘れ、適当な列車に乗って、知らない街に行ってみたくなる。その一例を今から紹介してみようと思う。

季節は冬、どうせなら雪が見たい。そんな訳で、比較的東京から近い雪国に行くことにする。池袋から夜行快速「ムーンライト」に乗り、一路新潟県坂町へ。

この坂町から山形県の米沢まで米坂線というローカル線が走っている。

全線（九〇、七km）非電化で二両編成の気動車が約二時間半で両駅を結ぶ。

一番列車に乗ってみる。発車すると大きく右にカーブして羽越線と分かれる。田んぼの中を通り抜けると、左手に荒川峡という峡谷が見える。だんだん山深くなり県境を越えて山形県へと入って行く。山が開けた所で小国という駅に着く。その駅の近くには小国温泉があり、安い公衆浴場がある。また山が深くなり羽前沼沢駅に着く。ここは五m三〇cmの積雪記録がある。山が開け、三六〇度水田地帯を通り過ぎ、家が増えてくると終点の米沢である。



東京から夜行で一泊二日の旅。皆さんも一度試してみてはどうだろうか？

現在にいたるまんがの形成とその未来

まんがは日本の文化の一つだ、そう思う。ここでこれから述べるのは鎌倉時代の鳥獣戯画にみられるものでなく、戦後の手塚治虫氏らによって描かれるようになったものである。

戦後から47年の歳月が流れ、まんがもその時代とともに変った。描き方の手法つまりテクニックや画材、テーマ、ジャンルはもちろん、それを描くまんが家やその人口もである。

昔は描けばそれが新しいジャンルとなるようにとても開拓性とでいうものがあった。そしてその頃のまんが家の数はとても少なく、今の数とは比べものにならないのであった。今は数も多くその描くジャンルも、同じようなものを描く人が大変増えてきている。しかしそれでも試行錯誤を繰返しながら、新しい試みをしようとしてる人もいる。その点は留意すべきである。

今がまんが家にとって描くことが難しい時代になってしまったと思われる原因は、個人の嗜好の細分化にあるように思われる。昔と比べ、ありとあらゆることにおいて選択肢が増えることから生ずるわけだが、それがそのまま今のまんがに当てはまり相乗効果となっている。そんなことがヒットするまんがをでにくくしているかのようだ、それに同人誌の存在である。これはごく特定の少数の読者をターゲットにしたものなのだが、それが商業誌に連載しているまんがより早くよく売れてしまうというのは、時代の流れといった言葉で簡単に片付けてしまって良いのだろうか。

まんが家は今の社会をつまり読者も含めてとらえがたく思っている。そこには昔と比べ読者からの反応の弱さという要因も入ってくる。

今はまさにまんが家にとって戦国時代なのではないだろうか。そしてそんな中で後世に残る名作、日本の文化としてのまんがを語ることができるだけの作品はまんが家の努力だけは生まれない。そんな作品が生まれるかどうかは送り手であるまんが家と、受け手である読者の関係しだいなのである。

お知らせ

吹奏楽部三十周年記念第十四回定期演奏会について

日時　三月三十一日火曜日
　開場　午後六時
　開演　午後六時半
会場　練馬文化センター大ホール
内容
「第一組曲」
「宝島」
「テキーラ」
「サウンド・オブ・ミュージックメドレー」
「一八一二年」等

たまには、生演奏を聞いてみるのもいいのでは。

新聞小委員会から

この新聞に対する、ご意見、ご感想、投書などありましたら、クラスの新聞委員までお寄せ下さい。

編集後記

来年度から、受験生と考えると頭の痛い今日この頃。帰宅すると連日のように送られてくる塾・予備校の勧誘のビラ。行く気が全くない私は、ゴミを送り込まれて不快。H

今現在（2/28）で進級できるか不安な状況にいる。数学と理科。この二教科がなければ楽なのだが。二年生になれることを夢見て、問題集を解いている毎日だ。（M田）

最近どういう訳か眠たい。先日なんか、ヤルぞ！と机に向かったまでは良かったが、気付いたらそのまま朝になっていたのだ。疲れているのかなあ。　M・N

大泉高校新聞一五〇号突破おめでとう!!記事を書いてくれた人も御苦労様！最後まで読んでくれてありがとう！

GORO

「ダンス発表会と柔道大会の原稿は二十八日の朝〆切りだから徹夜で頑張って」なんて、ありがたいお言葉をありがとう委員長。でもそんなに時間はとりませんでした。N

二月二十七日に行われた柔道大会はすごい熱気で、驚きながらも観客の一員となって応援していた。試合の勝ち負けに関係なく、一生懸命な姿に感動した。　お

武士についてもっと書いておきたかったがまたの機会にしたいと思う。これまで日本のものばかりだったのでそのうち中国などの歴史なども調べてみたいと思う〈公倍数〉

疲れた、疲れた、疲れた。こんなに疲れるものだとは思わなかった。こんな大変なものだとは思わなかった。新聞作りは大変なものである。ヒコーキにせぬように。上質紙であるから保存状態はよいはずだ。一生の記念に。委員長